

ートを創出する。9曲目はバラードの「忘れ去られた愛」。ハービーはストリングスをバックにしっとりピアノを奏でる。ジャコは参加していない。

その後、ウェザー・リポート参加により出世したジャコは、一

【Actual Proof 楽曲分析～解説】

by 田中 裕士(Pianist)

収録アルバム Herbie Hancock / Flood Recorded: 1975

Live at 渋谷公会堂 6月28日 & 中野サンプラザホール 7月1日

Musicians

Herbie Hancock : Acoustic Piano, Fender-Rhodes Electric Piano, Synthesizers

Mike Clark : Drums Paul Jackson : Bass Bennie Maupin : Soprano and Tenor Sax, Saxello, Bass

Clarinet and Flute Blackbird Mcknight : Guitar Bill Summers : Percussion

【70年代ハービーの“ブラック・ファンク”5部作中で貴重なるライブ盤】

1973年作品『ヘッド・ハンターズ』に始まり、1974年『ラスト』、1975年『マン・チャイルド』、1976年『シークレッツ』、そして本作 1975年日本公演のライブ盤『Flood/洪水』の5作品は、『70's ハンコックのブラック・ファンク5部作』だと私は確信する。この4年間に発表した上記5枚に及ぶ意欲作により、ハービー・ハンコックは(コアなジャズファンを超えて)広い意味でのブラックミュージックファン全般にその人気を拡大し、不動のステイタスを築き上げたと言える。各作品については一環したファンク音楽的指向がうかがえるが、

各アルバムに収録されている楽曲を綿密に研究～解析してみると、個々に音楽的趣向がいささか異なることが解る。特筆すべきことは、このアルバムが前述の5アルバムの中で唯一のライブ盤であり、1975年@日本公演の貴重な記録であるということである。LP盤が廃盤になり、'90年代半ば頃までなかなかCD化されず、我々プロの演奏家やマニアの間でのみ高く評価され秘かに愛聴されていた音源なのだが、現在ではCDとして簡単に入手できるようになったことは喜ばしいことである。

【ハービー35歳@その先進的音楽指向と偉大なる功績】

1967年にJohn Coltraneというジャズ界の革命家—重鎮が来世に旅立ち、ジャズ界は暗中模索期を迎えていた。コルトレーンが残した音楽的方法論・イデオロムを道標としたMcCoy Tynerをリーダー的存在に持つコアなジャズミュージシャンの若手達、そしてもう一方は、ジャズの音楽的ルーツに根ざしながらも、よりコンテンポラリーなイデオロムと進化を求めた、Miles Davis門下の若手ミュージシャン達。(勿論、ハービーはその後者に属する演奏家であることは周知の事実である)

—この、いわば派閥的な2つの流れが、以後の二大メインストリームとなっていった。

その当時(1970年代)の様々な文献等を調査してみると解ることだが、いわゆる『オーケランド・ファンク』と呼ばれるグルーブをジャズのイデオロムと融合させた、そのハービー・ハンコックの遠見性・ポピュラリティーは一部のコアなジャズファンやプレイヤーからは批判されることになったという悲しい事

実がある。『ハービーの音楽はジャズか? いやジャズではない。ファンクか? いや、コマーシャルな商業音楽だ。どうもダンスミュージックらしいな』・・・というような、的はずれな会話であったことは(諸先輩方からも聞いたことがあるし)察するにおよそ間違いのないことであろう。が、しかし—私はこの浅薄な偏見性に対して、2010年を目前に今さらながら声を大にして反発反論したいのである。1970~80年初頭、当時のアメリカの黒人達の大多数が、その当時どのような音楽を求め、愛好していたのか? ハービーは自身の持つ抜群のアンテナでそのムーヴメントをいち早く察知し、ジャズとファンクを融合することに成功した。さらにはより多くの聴衆・広範囲との音楽を通じた対話を確立し、次世代へのジャズの進化とニューイデオロム、そして“美”を提示した。その功績、さらには後生のミュージシャンに与えた影響を察すると、その実証はあまりにも大きく、比類無き偉大さであると私は確信している。

躍人気者となる。1978年には、立派になったジャコをハービーは自己のリーダー作『サンライト』に迎え、彼を大きくフィーチャーした「グッド・クエスチョン」を吹き込んでいる。

【Actual Proof / 楽曲構造】

[Vamp] [A] というフォームで、それぞれ4小節+15小節=計19小節が主題部となっている。

主題はファンクグルーブの上で大変トリッキーなメロディが、ベニー・マウピンのフルートとハービーのピアノで提示される。ラスト3小節が、【5拍子→4拍子→3拍子】となっていることも興味深い。5+4+3=12で4拍子記譜で3小節表記も可能ではあるが、ハーモニックリズムとアクセントを思慮すると、あえて変拍子記譜のほうが理解しやすいので、そのように記した。

【※(5)・・・5拍、※(4)・・・4拍、※(3)・・・3拍の意味である】

主題部提示の後、やはり同じフォーム(形式)に乗っ取り、ハービーのピアノインプロヴィゼーションが展開されてゆくが、これがあまりにも素晴らしく、私はまるでジェットコースターに乗って猛スピードで走り抜いてゆくようなエクスタシーさえ感じる。このアルバムは長年に渡り、何百回と愛聴しているが、毎回とんでもない体験だと鳥肌が立つ。マイク・クラーク(Ds)、ポール・ジャクソン(B)は微塵も軸がぶれることなく、強力なグルーブと躍動感溢れるリズムで、ハービーを支える。それはまるで極上の絵画を支える金の額縁のようだ。さすが、オーケランドファンクのエグゼクティヴミュージシャンだなあと感動を覚えるのは恐らくピアニストの私だけではないであろう。

【ハービーの唱える、ジャズの定義そしてグローバルリズム】

ハービーが、1970年代当時の黒人・白人の区別的(差別的)意識を越えて、よりグローバルな境涯に立ち、新しいジャズイデオロムを提示することを主眼としていた—という点で、彼は利口で先進的であった。当時のアメリカ庶民層が求めていた音楽を(便宜上)ファンクやニューソウル(ブラックコンテンポラリー)という言葉で呼ぶならば、それらもジャズと同様にブルースから発展してきた黒人ルーツの音楽であり、1970~1980・・・とその時その時の“今”に相応しい黒人の新しい意識を反映したBlack Musicであったのだと確信してやまない。ただし“ジャズ”という、いわゆるインターナショナルアートフォームとしての「手法や手段」としての意味—意義は、1990年以降からさらなる国境を越え、グロー

バルな進化発展を遂げて、その定義を拡張してきたわけだが、当研究論文でフォーカスされるべき論点ではないので、あえて割愛させていただく。

最後に、深く敬愛するハービー・ハンコックのインタビューから、彼自身が切実に話してくれた提言を紹介して今回は終わりにしたい。—『ジャズがなぜ世界中の人々の心をつかんできたのか?—その理由は、人間の体験から生まれた音楽だからだ。それは、黒人の奴隷制度の体験に限ったものではない。ジャズは、奴隷という“毒”を、より素晴らしい“薬”に変える、人間の生きる力から生まれたものなんだ。(仏法における変毒為薬の意)』(ハービー・ハンコック談)

ハーモニー(コードチェンジ)についても、いかにもハービーが好きそうな配置である。

参考までに大まかなアウトラインのコードチェンジのみを記しておく。

【Chord Changes for Piano Improvisation】

| Cm7(11) | Cm7(11) |
Cm7(11) | Cm7(11) |
| G b M7(b 5) on B b | A7 alt. |
A7 sus4 | A7 sus4 |
| E b m7(b 5) | E b m7(b 5) |
AM7(9) | AM7(9) |
| ※(5) E b M7(b 5) on D | ※(4) F7 |
| ※(3) F7 |

【Hang Up Your Hang Ups 楽曲分析～解説】 by 田中裕士(Pianist)

収録アルバム Herbie Hancock: Man-Child

Recorded: 1975

Musicians

Herbie Hancock : Acoustic Piano, Fender-Rhodes Electric Piano, Arp Odyssey, Pro Soloist, 2600 and String Ensemble Synthesizers, Hohner D6 Clavinet, Oberheim Polyphonic Synthesizer;

Mike Clark, Harvey Mason, James Gadson : Drums; Paul Jackson, Louis Johnson, Henry Davis : Bass; Wayne Shorter : Soprano Sax; Bennie Maupin : Soprano and Tenor Sax, Saxello, Bass Clarinet, Bass and Alto Flute/Blackbird McKnight, David T. Walker : Guitars; Bill Summers : Percussion; Bud Brisbois, Jay DaVersa : Trumpets; Ernie Watts, Jim Horn : Saxes and Flutes; Garnett Brown : Trombone; Dick Hyde : Tuba and Bass Trombone; Stevie Wonder : Harmonica; Wah Wah Watson : Guitar, Voice Bag, Maestro Universal Synthesizer System, Maestro Sample and Hold Unit.

【70年代ハンコックの“ブラック・ファンク”作品】

1973年作品『ヘッド・ハンターズ』に始まり、1974年『スラスト』、1975年日本公演のライブ盤『洪水』、そして1975年本作『マン・チャイルド』、最後に1976年『シークレツ』の5作品は、『70'sハンコックのブラック・ファンク5部作』だと私は思う。この4年間に発表した上記5枚に及ぶ意欲作により、ハンコ

【音楽的指向】

このアルバムは、まず大きな特色として、(※注1)オーケランド・ファンクの影響を多大に受けたサウンド創りが特徴だといえよう。(ピアノ/キーボード奏者である)私を感じるに、ハンコックの音楽的思考は、電子楽器(シンセサイザー、エレクトリックピアノ等)の進化発展と共存共栄し、無限大の拡がりを見せてきたと思う。具体的軌跡の1例としては、(※注2)オーバーハイムを使い始めたのも、この1975年録音の同アルバムからである。当時にしては革命的発明であったオーバーハイムのようないわゆる Polyphonic Synthesizer の出現により、ハンコックはプラスセクションやストリングセクションのオーケストレーションを精巧に創り始める。

新しい楽器の出現が彼の創造意欲を駆り立て、そういった新しい挑戦が、今までにはなかった音楽的成果を遂げているといえる。こういった思考・音楽的アプローチも、前述のオーケランド・ファンクの美意識から受けた影響を、彼自身がさらに発展進化させたものと言えるかもしれない。

【楽曲構造】

[A] [B] [C] [B] というフォームで、それぞれ8小節ずつ、計32小節が主題部となっている。

ハーモニー的には(一部の Passing Chord を除いては)約90%の部分が E7 Harmony のみで構築されている。E7 はファンク・ミュージック全般で好まれるトナーリティー(調性)で、察するにギターやベースの解放弦が響かせ易いというような意味に由来する伝統的流儀ではないかと思う。

主題部提示の後、やはり E7 Harmony のみで Vamp (Groove 感を聴かせる役割のパート)が繰り広げられるが、その後次第にベニー・マウピン(Sax)のインプロヴィゼイシ

ョックは(コアなジャズファン粋組を超えて)ブラックミュージックファン全般にその人気を拡大し、不動のステイタスを築き上げたと確信する。各作品については一環した指向がうかがえるが、よくよく研究してみると、個々に音楽的趣向がいささか異なる。

※注1: サンフランシスコ湾東岸に広がる地域、このエリアで70年代、黒人街があって、リズム&ブルースやアーバンブルースの温床になってきた。そうした伝統の中から、スライ&ファミリーストーン、タワー・オブ・パワーといった強烈なファンクバンドが出現した。このオーケランドにはジャズ、ロックのクラブが多数存在し、若手ミュージシャンが中心になって地域独特の強烈なサウンドを創るムーブメントが当時あった。その音楽スタイルを、『オーケランド・ファンク』と呼ぶ。ちなみに、ハンコックが1973~1976年に起用した、マイク・クラーク(Ds)、ポール・ジャクソン(B)らも、オーケランド・ファンク派の逸材ミュージシャンであった。

※注2: “Oberheim” 1度に2音以上を同時にさせる Polyphonic Synthesizer の有名ブランド。70年代当時に於いては革命的名機であり、価格もかなり高価なものであった。いち早く自身の音楽に取り入れ、使いこなしなのが、ハービー・ハンコック、故/ジョー・ザビヌルらであった。

ンに突入、心地良いサクソブローが続く。その後、主題部 [C] [A] [B] という順序での24小節が Interlude として使用され、Transition(トナーリティー転調)として、初めて [D] 部分が提示される。

この[D]部分は、ピアノのインプロヴィゼイションに円滑に進まず為の接続部という役割を果たし、E7 → G7 という短3度上へのトータルセンター(調性基音)の移動に何ら違和感すら感じさせることなく、エモーショナルにハービーのインプロヴィゼイションへとなだれ込んでゆく。“Hohner D6 Clavinet” や “Oberheim Polyphonic Synthesizer” を駆使

して、Groovy なバックিং・オーケストレーションを奏でていたハービーが突如 Acoustic Piano でインプロヴィゼイションを始めるのだが、ピアノの音が妙に新鮮に、一瞬まるで新しい楽器のように響き出すのが不思議なハンコックマジックとも言える。こういった使用楽器の使い分け、音色コントラストの配色センスなどなど、まさに比類無きハンコックサウンドのエクスタシーである。

ピアノ・インプロヴィゼイション用に設定されたコードチェンジは、(いくつかのカラーコード、パッシングコードが絶妙に使われており、それらの総てをコードシンボルとして書き記すことは至難)大まかな流れとして下記の8小節のループで展開される。

トータルセンター(ベース)が G 音にステイしているのだが、

【Jazz 発 ~Black Funk 経由~ Fusion 行】

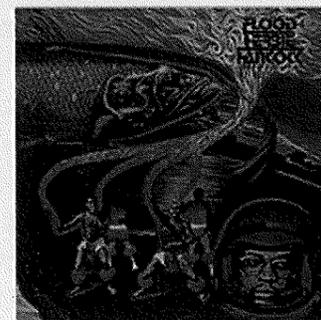
“Hang Up Your Hang Ups” — 私が最初この楽曲を耳にした当時(17歳くらいの少年だった)、とても難解怪奇に聞こえたのは事実である。しかし、その楽曲(音楽)の構造や魅力、そして流儀を知るにつれ、とても理解が深まり親近感が湧いた記憶は懐かしい思い出。今回、執筆するにあたり久しぶりに何度も聴き入ってみたが、ジャズ歴史に於けるハンコックの功績の偉大さとその意義を改めて感じ、再び鳥肌の感動を覚えた。こういった(今から約33年前に)天才ハンコックが実験・創作・演奏した音楽が機となり、後に Cross Over, Fusion, Black Contemporary などといった音楽の確立へと繋がっていったことは、明確な音楽史(ジャズ進化の歴史)が物語っている。後生の音楽への影響力を考えると、その価値・意義の深さは世界遺産に匹敵するのではないかと私

＜アルバム解説 by 高木信哉＞

『洪水 ライブ・イン・ジャパン75/Herbie Hancock』

1. Maiden Voyage
2. Actual Proof
3. Spank-A-Lee
4. Watermelon Man
5. Butterfly
6. Chameleon
7. Hang Up Your Hang Ups

Herbie Hancock(p), Bennie Maupin(b), Paul Jackson(b), Mike Clark(ds),



上声部に構築されてゆくハーモニーの推移が実に心地良く響く。

こういった和声趣向は、ヘッド・ハンターズの頃からハンコックが好んで使い、確立した独自のアイデアである。私が察するに、ハーモニーのアイデアとしては、Miles Davis の音楽に、発想の基盤があるのではないかと感じる。勿論、近代クラシック音楽の和声概念からも彼は多くの知恵を取り入れているが、本作品に於いては明確なるその影響は聞こえてこない。

【Chord Changes for Piano Improvisation】

| G7 sus4 | E^bM7 on G | D^bM7(b5) on G | D^bM7(b5) on G |
| G7 sus4 | E^bM7 on G | A^bM7 on G | A^bM7 on G |

は感じているのである。

このアルバムの翌年1976年には“Secrets”、そして2枚組ライブ盤“ニューボートの追想”を発表し、エレクトリック・ハービー・ミュージックはさらに新しい方向へ躍進を遂げてゆく。そしてコンピュータ、サンプリングなどの時代の新技術とともに先へ先へと進化し、1983年の歴史的傑作“Future Shock”まで昇りつめてゆくのである。次なるハンコックのヴィジョンは、ヒップホップ~ダンスミュージックであった。

Bill Sammers(perc), Blackbird McKnight(g)

ハービー・ハンコックの通算15作目のリーダー作。ハービーは、1964年、マイルス・デイビスと初来日を果たした。それから10年後の1974年、遂に自らのバンド、ヘッドハンターズで来日し、日本全国に旋風を巻き起こした。本作は、その1年後、ハービーのヘッドハンターズの2度目の来日公演を記録した貴重なライブ録音盤である。収録された1は『処女航海』(1965年録音)、4と6は『ヘッドハンターズ』(1973年)、2と3と5は『スラスト(突撃)』(1974年)、7は『マン・チャイルド』(1975年7月録音:本作演奏時はまだ録音されてなかった)からセレクトされている。

ハービーのヘッドハンターズの圧倒的な演奏と実力がたっぷり楽しめる傑作である。特に冒頭の「処女航海」~「アクチ